『語用論研究』第 19 号(2017 年) pp. 106-117
© 2017 年　日本語用論学会

［書評論文］

Masa-aki Yamanashi（ed.）*Cognitive Lingusitics*. Vol. 1～5

London: Sage Publications, 2016. xlix + 247（Vol. 1）+ 253（Vol. 2）+ 296（Vol. 3）+ 331（Vol. 4）+ 295（Vol. 5）p. ISBN: 9781446298732

尾　谷　昌　則
法政大学

1.　本書の概要と認知言語学

本書は、日本認知言語学会と本学会の会長を歴任した山梨正明氏が編者となり、イギリスの SAGE 出版から刊行した認知言語学（Cognitive Linguistics、以下 CL）のアンソロジーとも言える 5 巻組の論文集である。1970 年代にその萌芽が見られる CL は、生成文法に代表される形式主義的な言語観へのアンチテーゼとして主に意味論を中心に発展したが、人間の認知能力という観点から言語能力および言語知識を問い直す試みは、広く音韻論、形態論、統語論といった領域にまで及び、現在に至るまでその発展の歩みは衰えるところを知らない。

CL の影響は、もちろん語用論の分野にも及ぶ。これは、すでに古典的名著と呼んでも過言ではない編者の一連の著作（山梨 1986、1988、1992、1995）を見ただけでも一目瞭然であろう。語用論で扱われる主なトピックは、ダイナミックに繰り広げられる言語の使用と解釈を扱ったものであり、その主体である我々人間の認知活動とは不可分の関係にある。そのため、山梨（2001: 179）はいち早く「認知語用論」を「認知能力の観点から、言葉の使用と解釈の諸相をダイナミックに研究していく新しい語用論の研究」と定義した。さらに、本学会会長の就任講演に基づいた山梨（2009b）では、一見すると静的で自律的な言語知識として解釈されがちな文法に対しても、具体的な伝達文脈において時間軸に沿って展開してゆくダイナミックな認知プロセスを重視し、多分に認知語用論の観点を取り入れた「オンライン文法」の文法観を提示するまでに至った。近年では、認知言語学のシリーズ書籍の中にも「認知語用論」と銘打った巻が設けられており（崎田・岡本 2010、小山・甲田・山本 2016）、CL のパラダイムが語用論へ与える影響は、今後ますます大きくなるものと思われる。

さて、本書は 1970 年代に発表された記念碑的な論文からごく最近の論文まで、計 53 編を以下の 5 つの巻にまとめている。少々紙幅を義性にするが、どれも重要な論考であ

るため、敢えて論文名と著者名を全て記しておく。

Vol. 1 Theory and Method

1. Newman, J. : *The Quiet Revolution—Ron Langacker's Fall Quarter 1977 Lectures.*
2. Evans, V., B. K. Bergen and J. Zinken : *The Cognitive Linguistics Enterprise—An Overview.*
3. Lakoff, G. : *Cognitive versus Generative Linguistics—How Commitments Influence Results.*
4. Fauconnier, G. : *Cognitive Linguistics.*
5. Langacker, R. W. : *An Introduction to Cognitive Grammar.*
6. Gibbs, R. W. : *Why Cognitive Linguists Should Care More About Empirical Methods.*
7. Johnson, M. and G. Lakoff : *Why Cognitive Linguistics Requires Embodied Realism.*
8. Rohrer, T. : *Embodiment and Experientialism.*
9. Fillmore, C. : *Some Thoughts on the Boundaries and Components of Linguistics.*
10. Talmy, L. : *The Relation of Grammar to Cognition.*

Vol. 2 Cognitive Phonology and Morphology

11. Lakoff, G. : *Cognitive Phonology.*
12. Välimaa-Blum, R. : *Phonotactic Constraints in Cognitive Phonology.*
13. Kristiansen, G. : *Towards a Usage-Based Cognitive Phonology.*
14. Bybee, J. L. : *Word Frequency and Context of Use in the Lexical Diffusion of Phonetically Conditioned Sound Change.*
15. Sosa, A.V. and J. L. Bybee : *A Cognitive Approach to Clinical Phonology.*
16. Hopper, P. J. : *Phonogenesis.*
17. Wheeler, D., and D. S. Touretzky : *A Connectionist Implementation of Cognitive Phonology.*
18. Bertinetto, P. M. : *Phonological Representation of Morphological Complexity - Alternative Models*（*Neuro- and Psycholinguistic Evidence*）.
19. Besedina, N. : *Evaluation through Morphology—A Cognitive Perspective.*
20. Rhodes, R. A. : *What is a Morpheme?—A View from Construction Grammar.*
21. Janda, L. A. : *Metonymy in Word-Formation.*

Vol. 3 Cognitive Grammar and Syntax

22. Fillmore, C. J. : *The Mechanisms of Construction Grammar.*
23. Langacker, R. W. : *Constructions in Cognitive Grammar.*
24. Goldberg, A. E. : *Constructionist Approaches to Language.*
25. Croft, W. : *Logical and Typological Arguments for Radical Construction Grammar.*
26. Lakoff, G. : *Linguistic Gestalts.*
27. Lakoff, G. : *Syntactic Amalgams.*
28. Hopper, P. J. : *Emergent Grammar.*
29. Langacker, R. W. : *Metonymic Grammar.*

30. Gries, S. Th. : *Towards a Corpus-based Identification of Prototypical Instances of Constructions.*
31. Stefanowitsch, A. and S. Th. Gries. : *Collostructions: Investigating the Interaction between Words and Constructions.*

Vol. 4 Cognitive Semantics

32. Fillmore, C. J. : *An Alternative to Checklist Theories of Meaning.*
33. Langacker, R. W. : *Context, Cognition, and Semantics: A Unified Dynamic Approach.*
34. Lakoff, G. and M. Johnson : *Conceptual Metaphor in Everyday Language.*
35. Goossens, L. : *Metaphtonymy—The Interaction of Metaphor and Metonymy in Expressions for Linguistic Action.*
36. Talmy, Leonard. : *Force Dynamics in Language and Thought.*
37. Fauconnier, G. and M. Turner : *Conceptual Integration Networks.*
38. Coulson, S. and T. Oakley : *Blending and Coded Meaning - Literal and Figurative Meaning in Cognitive Semantics.*
39. Clausner, T. C. and W. Croft, W. : *Domains and Image Schemas.*
40. Dodge, E. and G. Lakoff : *Image schemas—From linguistic Analysis to Neural Grounding.*
41. Gallese, V. and G. Lakoff : *The Brain's Concepts—The Role of the Sensory-Motor System in Conceptual Knowledge.*

Vol. 5 Cognitive Linguistics and Related Fields

42. Tomasello, M. : *First Steps toward a Usage-Based Theory of Language Acquisition.*
43. Dabrowska, E. : *The LAD Goes to School—A Cautionary Tale for Nativists.*
44. De Rycker, A. and S. De Knop : *Integrating Cognitive Linguistics and Foreign Language Teaching—Historical Background and New Developments.*
45. Croft, W. : *Linguistic Selection—An Utterance-Based Evolutionary Theory of Language.*
46. Freeman, M. H. : *Cognitive Linguistic Approaches to Literary Studies—State of the Art in Cognitive Poetics.*
47. Lakoff, G. : *The Neuroscience of Form in Art.*
48. Sweetser, E. : *What Does It Mean to Compare Language and Gesture? - Modalities and Constrasts.*
49. Núñez, R. E. : *Conceptual Metaphor and the Cognitive Foundations of Mathematics.*
50. Deane, P. : *Neurological Evidence for a Cognitive Theory of Syntax—Agrammatic Aphasia and the Spatialization of Form Hypothesis.*
51. Feldman, J. and S. Narayanan : *Embodied Meaning in a Neural Theory of Language.*
52. Kravchenko, A. : *Cognitive Linguistics, Biology of Cognition and Biosemiotics—Bridging the Gaps.*

53. Zlatev, J. : *Cognitive Semiotics—An Emerging Field for the Transdisciplinary Study of Meaning.*

収録論文のタイトルを見ると、CL が意味論、形態論、音韻論、統語論といった言語学の主要領域だけでなく、歴史言語学や類型論、第二言語習得、人文学研究、失語症、神経科学、記号論といった関連分野へも幅広く展開していることが見てとれる。この点については、大風呂敷を広げさせたら右に出る者はいない編者による、31 ページにも及ぶ導入が第 1 巻の巻頭にあり、さながら絵巻物のように多彩で壮大な概説が繰り広げられている。

しかし、上記の目次を見ていると、残念ながら「語用論」という言葉が見あたらないことに気づく。これは、意味論と語用論の間に明確な境界線を認めず、むしろ両者は連続体を成しているという意味観（Langacker 2003, Vol. 4: 10、Evans, Bergen and Zinken 2007, Vol. 1: 19）が CL の基本テーゼの一つとしてあるからであろう。[1] この点については第 3 節で考えることとし、次節では、それぞれの巻ごとに論文をいくつか紹介しながら、CL の考え方と語用論との関わりについて概観する。特に、語用論への言及が最も多い Langacker（2003, Vol. 4）には紙幅を割くことにする。そして第 3 節は、本書の意義と今後の CL と語用論の研究に本書が与える示唆について考える。

2.　認知言語学と語用論

2.1.　第 1 巻「理論と方法」

ここには、CL が生まれた背景とその基本理念をまとめた重要論文が並ぶ。形式主義的な言語観と対比しながら CL の特徴とその必要性を説く Fillmore（1984）や Lakoff（1991）、身体性や経験基盤を重視する CL の言語観と方法論を説く Gibbs（2007）、Johnson & Lakoff（2002）、Rohrer（2007）、言語と認知の不可分な関係を説く Talmy（1988）、Fauconnier（2003）、CL の主要概念を体系的にまとめた Langacker（1986）や Evans, Bergen and Zinken（2007）などが収録されているが、中でも面白いのは、「静かな革命」と題して最初に掲載されている Newman（2004）である。これは、Langacker が 1977 年の秋学期に UCSD で行った講義をまとめたものであり、認知文法の骨子となる様々な概念、例えば精緻化（elaboration）に欠かせない自律性／依存性の概念（p. 6–7）や、形式と意味の結びつき（p. 8–9）、語彙ネットワーク、プロトタイプ、そして多義性（p. 9–12）などについて書かれている。後半では文法の全体像を「言語ユニットの目録」

[1] 本稿はあくまでも論文集の書評であるため、出版年はオリジナル論文のそれを記すが、ページ番号は当該論文を集録した巻号のページ番号のみ記すことにする。

と定義し（p. 13、図 12）、それに基づいて英語の受身構文を語彙的ユニットの複合体として捉えるアイデア（p. 13、図 13）を提示している。図式はどれも手書きであり、草創期の貴重な資料として非常に興味深い。

この講義で示された諸概念は、同巻収録の Langacker 論文で精緻化されており、読み比べると面白い。前半では、ベースとプロファイルの区分、概念化、認知ドメイン、特定性、叙述のスコープ、図と地といった重要概念が紹介されている。例えば「斜辺」や「叔父」という概念は、それぞれ「三角形」や「親族」というドメインの一部分に相当するが、この時、後者のようなドメインをベースといい、その中で特に際立って認知されている部分（＝言語化されている部分）をプロファイルという。他にもこの論文では、(i) 言語の意味が概念化と同義であること、(ii) 概念化には単なる指示対象となる概念だけでなく、知覚や運動感覚、感情、そして様々なコンテクストも含まれること、(iii) 語彙項目に関する知識は、プロトタイプや抽象的なスキーマによって高度にネットワーク化されていること、(iv) 語彙の意味は素性の束（Kats & Fodor 1963）や意味原子（semantic primitives）に還元することはできず、ドメインとの関連によって規定される、といった主張がなされている。その後、“I sent a walrus to Antarctica.” とは言えるが、“I sent Antarctica a walrus.” という表現は不自然になるという例を挙げ、複合的言語ユニット（文法構文）としての与格構文が、to 前置詞句表現とベースは共有しながらも、それとは異なる対象をプロファイルした（＝異なる概念化がなされた＝異なる意味を持った）言語ユニットであると指摘している。さらに、このような慣習化された言語ユニットを構造化した目録こそが人間の言語知識であると説き（p. 91）、文法が意味と切り離された独自の表示レベルであるとする生成文法の理念を否定している。

注目すべきは、意味の定義の中に様々なコンテクスト情報も含めるとしている点である（Gibbs 2007, Vol. 1: 127、Langacker 1986, Vo. 1: 79）。Langacker の用語で比喩的に述べるならば、言語化された「発話」はプロファイルに相当し、これを適切に解釈するための背景となる発話文脈（発話の現場から得られる情報だけでなく、社会文化的知識も含む）がベースに相当すると解釈できる。このような前提に立てば、意味論と語用論が連続体をなす（Evans, Bergen and Zinken 2007, Vol. 1: 29）という CL の前提も違和感がない。

2.2.　第 2 巻「認知音韻論と認知形態論」

ここには、CL のアプローチを取り入れた音韻論や形態論に関する論文が収められている。Lakoff 論文では、統語論と同じように規則が順次適用されることで正しい出力が派生されると考える生成音韻論（Chomsky and Halle 1968）に対し、非派生モデルを提唱している。具体的には、記憶の貯蔵されている形態素のレベル（M レベル）とそれに対応する一連の音声のレベル（P レベル）、そしてその中間にある音素のレベル（W レベル）

が結びついて構成体（construction）を成すと想定し、各レベルで適用される規則とレベル間で適用される規則や制約が同時に適用されるとした。規則と制約を明示的に設定しているあたりは生成音韻論的な匂いも残してはいるが、構成体という概念を利用して非派生的なモデル化をしているあたりは大いに評価されるべきである。Wheeler and Touretzky の論文は、このアイデアの元になった Lakoff（1988a, 1988b, 1989）の発想を評価し、これをコネクショニズムの枠組みに応用する際の問題点について論じたものである。

他にも、英語の否定縮約形や一般動詞の過去形態素における /t, d/ 音の脱落が、特定の環境で使用される頻度によって変化するという事実を事例集積モデル（exemplar cluster model）によって説明した Bybee（2002）や、ロシア語・チェコ語・ノルウェー語の複合語をメトニミーの観点から分析し、伝統的な語形成論よりもメトニミー分析の方が示唆に富む分類が可能になると説いた Janda（2011）、文法化がさらに進んだ段階として、古くなった形態素が、意味の無い単なる音韻的な要素へと変化する音韻発生（phonogenesis）について論じた Hopper（1994）などの論考も興味深い。Hopper は、Givón（1971: 413）の “today’s morphology is yesterday’s syntax.” という言葉をもじって、“today’s phonology is yesterday’s morphology.” と表現し（p. 119）、音韻変化と文法化研究の融合を示唆している。

2.3. 「認知文法と認知統語論」

ここには、いわゆる文文法に関する論考が収められている。その後の構文文法の発展に大きな影響を与えた Fillmore（1988）では、いち早く継承（inheritance）について言及している点で興味深い。他にも、認知文法における構文観を示した Langacker（2003）や、言語類型論も視野に入れた根源的構文文法（Radical Construction Grammar）について述べた Croft（2005）など、個性的な構文文法理論が並ぶ一方、Goldberg（2013）は Oxford ハンドブックに掲載された構文文法の概説的な論考であり、諸家の構文文法の共通点を最新の知見からうまくまとめている。

いわゆる “構文文法” とは呼ばれないものの、その発展に大きく寄与した Lakoff（1974, 1977）が収録されているのは意義深い。例えば Lakoff（1974）は、文の中に、その文の論理構造には含まれない語彙の塊（chunks of lexical materials）を持つ特殊な文の存在を指摘し、この種の統語的融合文（syntactic amalgams）は特定の意味論的・語用論的コンテクストに応じて、全く異なる派生を経た文を融合させなければならないと論じている（p. 169）。例えば、“John invited *you’ll never guess how many people* to his party.” という融合文は、一般的には、“John invited *a lot of people* to his party.” と解釈されるが、場合によっては “John invited *few* people to his party.” とも解釈されるため、どちらが主節に融合される文の深層構造となるかは、コンテクストによって決まるとしている。また、“You couldn’t open the door, could you?” という付加疑問文は、（74 年当時の）生成

文法では、“You couldn’t open the door.” という深層構造をコピーする変形規則によって派生し、意味構造は変わらないとされていた。しかし、この付加疑問文は単なる叙述だけではなく丁寧な依頼の意もあるため、これを説明するには “Could you open the door?” のような依頼文を変形させて、主節との統語的融合文を形成すると考えるしかない、と Lakoff は主張する（p. 185）。

この分析は、語用論を周辺的現象として軽視した変形生成文法の影響下にあるものの、埋め込まれる構文の深層構造がコンテクストによって決まるという皮肉な指摘は、語用論を研究する者にとっては痛快極まりない。他にも、構文について談話機能や情報構造の観点から構文を動機付けた論考が次々に生み出され（Lambrecht 1988、Ohara 1996、Ross-Hagebaum 2004）、現在では構文研究に語用論的視点が欠かせなくなっている。

語用論との関わりで言えば、談話やコンテクストの中で使用された具体的な発話を絶えず再構造化・再解釈したものが集積されることで文法が立ち現れるという「創発文法」（emergent grammar）を提唱した Hopper 論文にも言及しておかなければなるまい。「創発」という言葉は、歴史学者の Clifford（1986: 19）が文化について「一時的に立ち現れるもの」と評したことに由来し、文法が創発するメカニズムは Haiman（1991, 1994）のいうルーチン化（routinization）と同じであるという。実際に使用された一つ一つの発話を重視し、類推などの認知活動を通して後から規則が発現してくるという発想は、Bolinger（1961, 1976）をはじめ、Langacker（1987, 1988）の提唱する用法基盤モデル（Usage-based Model）や Croft（1996, Vol. 5）にも見られる。その意味では、語用論は文法の最前線を研究する分野であるとも言えよう。

2.4. 「認知意味論」

この巻では、心理条件的な意味観を否定し、フレーム知識とプロトタイプによって新たな意味観を提示した Fillmore（1975）や、日常言語には様々な力のダイナミクスが反映されていることを豊富な事例で示した Talmy（1985）など、最近では議論の俎上にのることも少ない論考が収められている。ただし、それは既にこれらが CL の中では当然の前提だからであり、決してその重要性が失われたからではない。

それ以外の掲載論文は、現在でも多数の研究が行われているメタファーやイメージ・スキーマに関するものが目立つ。Johnson and Lakoff（1980）は、*Metaphors We Live By* で新たな意味研究の地平を拓いた概念メタファーについて、その理論的意義をまとめている。Goossens（1990）は、メタファーとメトニミーが相互作用するメタフトニミー（metaphtonymy）を提唱し、Fauconnier and Turner（1998）は、メタファー理論のようなドメイン間の一方向的な写像ではなく、二つの領域から融合領域を作り出すブレンディング理論を提唱している。Clausner and Croft（1999）は、Langacker（1987）のいう「ドメイン」について詳細な議論を行い、これがイメージ・スキーマの下位類であることを指摘し

ている。Dodge and Lakoff（2005）は、イメージ・スキーマが様々な経験を抽象化して得られるものと見るのではなく、例えば〈移動〉においては、移動を経験している際に働く脳神経回路の動きそのものと見るべきであり、それに関与する神経回路は脳の様々な領域に分散していると説いている。これは並列分散処理モデルを取り入れた論考として注目に値する。

本論集の中で、最も語用論への言及が多い論考は、本巻収録の Langacker（2003）である。この論文では、(i) 意味とは概念化そのものであり、(ii) 概念化はダイナミックに展開する談話の中で実行されるため、コンテクスト情報や様々な因子の相互作用も必然的に含まれ、(iii) ゆえに意味論と語用論を明確に区別できない、という前提の下で、意味を辞書に掲載された静的な情報として扱うのではなく、辞書的意味と言語外的意味を統合したアプローチが必要であると主張している。例えば、“The cat is on the mat.” のような単純な平叙文は、発話行為論では断定（assertion）とされるが、それはある特殊な「相互作用フレーム」(interactive frame）における解釈でしかなく、飼い猫の様子を夫婦二人で眺めながら交わされる談話においては、単なる状況描写か、もしくは相手の注意を猫に向けさせる軽い指示行為となる。さらに、この発話に続けて “And George Bush is wise, intelligent, and intellectually honest.” と発話すると、それは「皮肉」の相互作用フレームで（再）解釈される。この種の皮肉は、既に英語談話においては慣習的なパターンとして確立しているため、形式と意味が結びついた慣習的言語ユニットと見なされるという。こういった言語ユニットは次のように図示される（Langacker 2003, Vol. 4: 31)。[2]

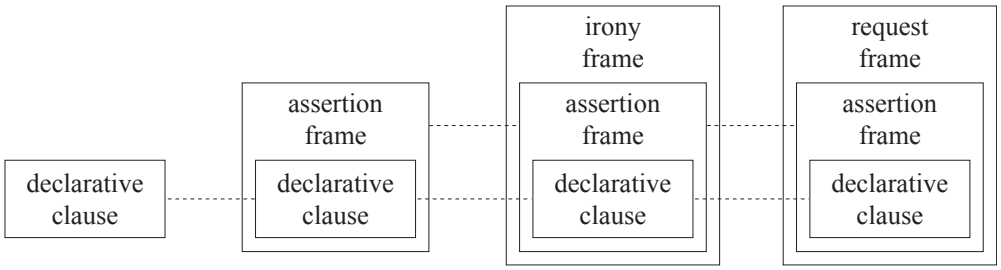

図 1

ある言語社会において、同じようなコンテクストの下で特定の言語ユニット A が繰り返し使用されると、コンテクストに含まれていた付随的な特徴 B がその言語ユニットに組み込まれ、意味の増加（augmentation）が起こり、新しい言語ユニットとなる。このプロセスは以下のように図示されている（Langacker 2003, Vol. 4: 45)。四隅が丸みをおびた四角形は、それが言語ユニットとして十分に定着していないことを表す。

[2] 図の右端にある request frame の例については、紙幅の都合で割愛する。

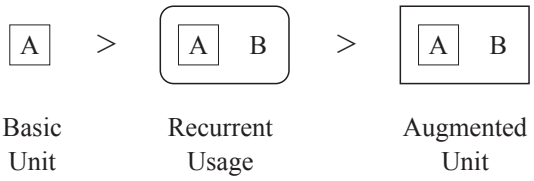

図 2

これらの指摘は、語用論的な示唆に富むものではあるが、問題点がないわけではない。例えば「相互作用フレーム」なる概念を持ちだしているが、これが Fillmore（1977, 1982）のいうフレームとどのような関係にあるのかが述べられていない。また、「意味の増加」についても、臨時的な推意がやがて言語表現の意味として定着する「語用論的強化」などが文法化研究の領域において数多く指摘されているにもかかわらず、そういった文脈との関係性については触れられていない。さらには、「断定」や「アイロニー」という相互行為フレームは示されているものの、どのような場合にそのフレームが発動するのかについては触れられていないため、語用論の研究者にとってはやや物足りなさを感じるかもしれない。意味論と語用論が連続体を成すとはいえ、両者が常に均質に混ざり合っているわけではないため、意味論寄りの研究者と語用論寄りの研究者とでは、同じ現象であってもプロファイルする問題点がやや異なるのも仕方がない。しかし、だからといって意味論と語用論の交流を絶やすわけにもいかない。それぞれが独立したモジュールであるかのように研究を進めるのは、決して得策とは言えないだろう。その意味では、Langacker の論考は、認知言語学者が語用論学者へ最大限のラブコールを送っている（もしくは、そのような含意がある）と解釈しておきたい。

2.5. 「認知言語学と関連領域」

さて、最後の巻については、紙幅も尽きてきたため、簡単に触れるにとどめたい。ここでは、CL の考えを言語習得に応用した Tomasello 論文、第二言語教育へ応用した De Rycker and De Knop 論文、文学研究に応用した Freeman 論文、ジェスチャー研究に応用した Sweetser 論文、記号論に応用した Zlatev 論文のように、様々な領域への広がりを感じさせる論考が収録されている。中でも、Lakoff 論文、Deane 論文、Feldman 論文のように、神経科学的な観点からの論考が目立つ。また、言語変化に進化論的な発想を援用し、個が互いに交配して少しずつ異なる別の個を生み出すように、発話もまた互いに交配して別の表現を生み出すと論じた Croft（1996）はユニークである。彼は、それらの発話（＝個）の集合体が言語（＝種）であるとも論じており、この点は 2.3 節で触れた Hopper（1988, Vol. 3）の創発文法と軌を一にする。

3.　本書の意義と語用論への示唆

さて、ここまで見てくると、これだけの論文集がこの時期に出版された意義が見えてくる。CL の源流が生まれて 40 年、その支流は言語学を越えた関連分野へも広がり、各地に豊かな実りをもたらしつつあるが、同時に、源流から支流までの全体像を掴むことが困難にもなってきている。本稿でもたびたび触れた Fillmore は、フレーム意味論や構文文法の発展に先鞭をつけた第一人者であるが、残念ながら 2014 年に白玉楼中の人となった。論文で誰もが引用する Talmy、Lakoff、Langacker をはじめ本書の編者も、皆すでに名誉教授である。CL のパラダイムはどこから生まれ、どこに行くのか。過去が過去になってしまう前にそれを再確認し、日本だけでなく世界の CL 研究の流れに棹を差すために、これまでの膨大な研究を総括するのは今をおいて他にないであろう。その意味で、本書が果たす役割は大きい。

本書が果たす役割は他にもある。今では日本語による入門書も充実しており、これ自体は大変ありがたいことである。しかし、一方で、主要概念の定義を日本語の入門書から引用する研究発表が散見されるようになった。話し手（発表者）と聞き手の解釈に齟齬が生じないようにするためにも、一人の研究者として厳密な議論を行うためにも、共有知識としての過去の研究文脈を踏まえておくことが重要であることは論を俟たない。自分のことを棚に上げて、と思わないでもないが、本書に収められた貴重なレガシーを受け継ぐ言語学者の一人として自戒を込めてここに記しておく。

さて、本書の各所で述べられている CL の理念を語用論という観点から眺めると、様々な示唆が得られることに気づく。その一つは、2.4 節でも書いた、意味論と語用論の境界についてである。日本語用論学会に第 1 回大会から参加している身として、あくまでも個人の感想であるが、「これは語用論学会で発表すべきものだろうか」と思うものがいくつかあった。意味論と語用論は確かに連続体を成すが、決して同一物ではない。否、言語記号の意味極という点では確かに同一物であるのだが、それぞれプロファイルする側面がややずれていると考えるべきである。例えば語の多義ネットワークは CL でも人気のテーマであるが、複数の語意味がまるで所与のものであるかのように設定し、その意味関係のみを論じるのであれば、語用論の色が薄いと言わざるを得ない。語が多様な用法を獲得して多義化するのはコンテクストや対話の中なのだから（東森 2017、中野 2017）、発話の現場でどのようなコンテクストが共有され、どのような推論が働き、どのように聞き手が解釈し、それがどう繰り返されて定着していったのか、そういったダイナミックな認知的活動の観察がまず重要なのであって、結果的に定着し、辞書に記載されている静的な意味同士の関係だけを論じても、得られる知見は少ないと思われる。上記の過程は、いわゆる語用論的強化（pragmatic strengthening）や、2.4 節で触れた意味の増加（augmentation）のことであるが、こういったダイナミックな観察をしてこそ、意味論と語用論の連続性は

体現されるということは忘れてはならない。

このような示唆を得た原因として、筆者の別の経験を紹介したい。以前、「すみません、もう閉店なんですけど」という発話における「けど」の意味が「依頼」であるとしている論考を読んだことがある。確かに、辞書にもそう書いてあることが多いし、店内にいる客に対しての発話であれば、「もう帰ってください」という依頼になる。しかし、忘年会を終えて、これから行く二次会の店を探そうと幹事が心当たりの店に携帯で電話をかけた際に、店主から「すみません、もう閉店なんですけど」と言われたら、これも依頼と解釈すべきだろうか。依頼として解釈されるのは、発話者の方から働きかけた場合であり、聞き手として返答した場合には、必ずしも依頼とは言えない。こうした視点はまさしく語用論の問題であり、Langacker（2003, Vol. 4: 31）の相互行為フレームを応用・精緻化するならば、上記の発話は相互行為の「行為者フレーム」と「被行為者フレーム」のどちらで解釈するかによって意味が異なる、と考えるべきである。相互行為フレームについては、2.4 節でやや苦言を呈しはしたものの、理念的には決して間違っておらず、むしろ語用論の側から積極的に精緻化してゆくことが望まれる。そういった相互行為が生まれることで、CL も語用論も共に発展してゆくはずである。本書はその示唆を与えてくれるという点において、非常に有益な存在である。

参考文献

Bolinger, D. 1961. “Syntactic Blends and Other Matters.” *Language*, 37(3), 366–381.

Bolinger, D. 1976. “Meaning and Memory.” *Forum Linguisticum*, 1(1), 1–14.

Chomsky, Noam, and Morris Halle. 1968. *The Sound Pattern of English*. New York: Harper and Row.

Clifford, J. 1986. “Introduction: Partial Truths.” In J. Clifford & G. Marcus (Eds.), *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, 1–26. Berkeley: University of California Press.

Fillmore, C. J. 1977. “Scenes-and-frames Semantics.” In A. Zampolli (ed.) *Linguistic Structures Processing*. 55–81. Amsterdam: North-Holland.

Fillmore, C. J. 1982. “Frame Semantics.” In The Linguistic Society of Korea (eds.) *Linguistics in the Morning Calm*. 111–37. Seoul: Hanshin.

Givón, Talmy. 1971. “Historical Syntax and Synchronic Morphology: An Archaeologist’s Field Trip.” *CLS* 7(1), 394–415.

Haiman, J. 1991. “Motivation, Repetition and Emancipation: The Bureaucratisation of Language.” In H. C. Wolfart (ed.), *Linguistic Studies Presented to John L. Finlay*, 45–70. Winnipeg, Manitoba: Algonquian and Iroquoian Linguistics (Algonquian and Iroquoian Linguistics, Memoir 8)

Haiman, J. 1994. “Ritualization and the Development of Language.” In W. Pagliuca (ed.), *Perspectives on Grammaticalization*, 3–28. Amsterdam: John Benjamins.

東森勲. 2017.『対話表現はなぜ必要なのか──最新の理論で考える──』東京：朝倉書店.

Katz, J. J. and J. A. Fodor. 1963. “The Structure of a Semantic Theory.” *Language* 39, 170–210.

小山哲春・甲田直美・山本雅子. 2016.『認知語用論』東京：くろしお出版.

Lakoff, G. 1988a. “A Suggestion for a Linguist with Connectionist Foundations”. In D. Touretzky, G. Hinton, and T. Sejnowski（eds）, *Proceedings of the 1988 Connectionist Models Summer School*, San Mateo, CA: Morgan Kaufmann Publishers. 301–314.

Lakoff, G. 1988b. “Cognitive phonology.” Draft of paper presented at the LSA Annual Meeting, December 1988.

Lakoff, G. 1989. “Cognitive phonology.” Draft of paper presented at the Workshop on Constraints vs. Rules in Phonology, University of California at Berkeley, May 1989.

Lambrecht, K. 1988. “There was a Farmer Had a Dog: Syntactic Amalgams Revisited.” *BLS* 14, 319–339. Berkeley: Berkeley Linguistics Society.

Langacker, R. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, R. W. 1988. “A Usage-based Model.” In Brygida Rudz-ka-Ostyn（ed.）*Topics in Cognitive Linguistics*, 127–161. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

中野弘三．2017.『語はなぜ多義になるのか──コンテキストの作用を考える──』東京：朝倉書店.

Ohara, H. K. 1996. *A Constructional Approach to Japanese Internally Headed Relativization*. University of California, Berkeley. Ph.D. dissertation.

Ross-Hagebaum, Sebastian. 2004. “The *That’s X is Y* Construction as an Information-Structure Amalgam.” *BLS* 30, 403–414. Berkeley: Berkeley Linguistics Society.

崎田智子・岡本雅史. 2010.『言語運用のダイナミズム──認知語用論のアプローチ』東京：研究社.

山梨正明. 1986.『発話行為』東京：大修館書店.

山梨正明. 1988.『比喩と理解』東京：東京大学出版会.

山梨正明. 1992.『推論と照応』東京：くろしお出版.

山梨正明. 1995.『認知文法論』東京：ひつじ書房.

山梨正明. 2001.「認知語用論」、小泉保（編）『入門語用論研究──理論と応用』179–194. 東京：研究社.

山梨正明. 2009a.『認知構文論──文法のゲシュタルト性』東京：大修館書店.

山梨正明. 2009b.「認知語用論からみた文法・論理・レトリック」『語用論研究』11, 61–97. 東京：開拓社.